

長崎に生きる

渡辺千恵子著

新日本新書=179

渡辺千恵子 (わたなべ ちえこ)

1928年生

1945年，長崎で被爆，半身不随となる。

1955年，「長崎原爆乙女の会」の結成に参加，以後，被爆者運動，
原水爆禁止運動にたずさわる。

長崎に生きる

新日本新書 179

1973年7月25日 初版

著者	渡辺千恵子
発行者	松宮龍起

郵便番号 102 東京都千代田区富士見2の13の14

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (265) 7006 (営業)

(265) 2075 (編集)

振替番号 東京 13681

印刷 享有堂印刷 製本 飯塚製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

長崎に生きる

渡辺千恵子著

新日本新書=179

目次

1	被爆後のわたし	5
2	生いたち	31
3	母スガのこと	51
4	「長崎原爆乙女の会」	69
5	原水爆禁止運動とわたし（その一）	105
6	原水爆禁止運動とわたし（その二）	143
7	生きるということ	173
	おわりに	187

1 被爆後のわたし

一九四五年八月九日——長崎

わたしは、十六歳の女学生だった。その日の長崎は、朝から雲ひとつないよい天気だったことをおぼえている。数日前から暑さがつづき、「学徒報国隊」として三菱電機製作所に動員されていたわたしは、家をでるところから今日も一日むし暑いなかで仕事をしなければならぬので、気分がすぐれなかった。しかし定刻の八時までにまにあうようにと、あわただしく朝食をすませ、油屋町の自宅から大波止の船着場へ急いだ。三菱電機製作所は、大波止の対岸の平戸小屋町にあった。原爆爆心地から二・五キロほど離れたところである。工場ではモンペ姿で、腕には「学徒報国隊」の腕章をつけ、「米英撃滅」、「撃ちてしやまん」の軍国主義教育を受け

ながら、探照燈の生産にたずさわっていた。

日本の降伏を目前にした時期ではありながら、わたしの所属していた巻線工場では、コイルづくりに追われ、真っ白い綿テープをせっせと巻いていた。九日の午前も、みんないつもと変わらない調子で、その日の暑いことなどを話題にしながら仕事をしていた。

ちょうど十一時ごろ、わたしはなにかの用事ができて、同級生の山下アヤ子さんと二人で、手のひらの小さな豆の固さを自慢しあいながら工場の通路を通りぬけ、本館の窓ごしにA技師の部屋をひょいとのぞいたその瞬間。

青白いセン光——腹の底に響く大音響とともに、わたしはガーンとたたきのめされ、気を失ってしまった。

「兄さん！」

どのくらいの時間がたったのだろうか。もうろうとした意識のなかで長兄（毅、三菱製鋼所で原爆によって爆死）を呼んでいた。フーッと正気にかえると、あたりは巨大な鉄骨がアメのように曲がりくねり、静まりかえった廃墟にただひとりポツンと、とり残されているのだった。

立ちあがろうとして、その瞬間、ハッとした。重い鉄骨のハリの下敷になって、身体がエビのように曲がり、頭と足がピタリくっついて、ぬけだそうにもぬけだせないのだ。

「助けて！」「助けて！」

つぶされたハリの下から、のどがハリ裂けんばかりに叫びつづけた。すると、すぐそばからも悲鳴が起こった。頭をやっと横へむけると、山下さんがうつぶせに倒れていた。

「助けて！」「助けて！」

二人はいつまでも泣き叫びつづけた。もうこれ以上がまんでできない。——そう思ったとき、わたしたちの声を聞きつけて、若い女の人が出てきてくれた。彼女は、すぐさまハリの隙間に四つんばいになり、「ウン、ウン」と全身の力をこめた。ハリがやっと浮きあがり、どうにかわたしたちは助けだされたのである。

わたしは、その女の人に抱きかかえられて立とうとしたが、いつときしか立ちとどまることができなかった。すでに腰から下の感覚はなくなっていた。

「渡辺さん、あんたなにしてるんヨ。はやく、はやく」

と、山下さんは叫んだ。

けれど、わたしは一步も歩けず、フラフラして安定感がなく、なんだか雲の上に乗っているような気分だった。

「歩けんとヨ、どうしても、どうしても……」

と泣きじゃくるわたしを、助けてくれた女の人と山下さんが抱きかかえ、やっとの思いで工場の裏山の防空壕にたどりついた。

悪臭でムンムンする防空壕は、傷ついた人たちでひしめき、血だらけの人がムシロの上にゴロゴロしていた。

「水を！ 水を！」

あちからからも、こちらからも苦しい叫び声。全身が焼けただれた人。ガラスやスレートの破片が無数につき刺さったままの人。

そのころ、市内のいたるところで、この世の終わりかと思われる惨状が現出していたのだ。防空壕は死体で埋まり、おびただしい負傷者が、なんら手当ても受けられないまま、路上でつぎつぎに息を引きとっていた。

八月九日午前十一時二分にアメリカが投下した一発のプルトニウム爆弾は、鎖国時代からの貿易港として三百八十年の歴史を誇り、キリスト教がさかんだったこの街、わたしがそこで生まれ育った長崎を、瞬時にして地獄図の修羅場と化してしまった。

激しい爆風によって、爆心地から約二・五キロ以内の家屋のほとんどが倒壊してしまった。街のいたるところから炎がふきだし、市内の三分の一が、たちまち火の海と化して、三日三

晩、延えんと燃えつづけた。倒れた家の下敷になったまま、助け出す人もなく、焼け死んでいった多くの人びと。このことを思うと、三十年ちかくたったいまでも、昨日のできごとのように戦慄させられる。

母の一念

わたしは、原爆によって脊椎を骨折した。手足の骨とちがって、特別の治療法とてなく、ただ板の上に薄いフトンをして寝ているほか、どうにもしようがない。被爆後、十日たち二十日たつと、骨折したところが腐りだし、母はどう処置してよいやらわからなく、ただうろたえるばかりで、つらかったという。当時、わたしが入院できるような病院は、ひとつもないありさまだったが、母が毎日のように走りまわったかいあって、八月下旬に、やっとある知人の紹介で鍼先外科病院に入院することができた。

入院前後は、体温が三十八度を上下して、食べものはのどをとらず、日増しに衰弱してゆくのが自分にもわかった。骨折した脊椎がさらに悪化し、それに原因不明の猛烈な下痢、吐き気とで、骨と皮だけの身体になり、ついに静脈注射もうてなくなった。

「お気の毒ですが……、おそろくもうだめでしょう」という医者の方葉を、寝食を忘れて看

病にあたった母をはじめ姉たちはどう思っただろうか。そのことを想像するだけでも、わたしの胸はしめつけられる思いがする。いまだに、母にそのときの気持ちを問いたただす勇氣はない。

「千恵子だけは死なせたくない」という母の一念が、現代の医学を越えた力となった。死の迫ったわたしに、好きなものをたくさん食べさせよう、十分につくして天命を待つということ。母は思ったにちがいない。医者の宣告があった日から、母はそれこそ死にもの狂いで栄養物を集めにかけてくりまわった。

ひどい食糧難の時代だった。最近になっても、母は当時のことを思い出し、その苦勞を笑いながら話す。そして最後には必ず、「千恵子は栄養がよかったから生きてこれたのだよ」という言葉で結ぶ。わたしもそう思う。

一時は、医者からも見放されるありさまだったが、母の深い愛情のこもった看護のおかげで、手のひらがそっくりはいるほどの大きな床ずれもどうにかなおり、一九四五年の年末には、半身不随のままではあるが、なんとか退院することができた。

被爆直後、「百年は草木も生えない」と信じられていた長崎の原子野にも、年月がたつにつれ街路樹が青々と美しくたちならぶようになり、爆心であった浦上のあたりも、住宅、商店、

観光ホテルなどで埋めつくされてきた。

しかし、あの悲劇は、いまでも被爆者とその家庭のなかに生きている。片淵町に原爆病院がひらかれたのは一九六〇年五月。これで被爆者の健康管理も一歩すすめられたのは事実だが、まだまだきわめて不十分であり、原爆症は被爆後三十年ちかかった今日も、なお猛威をふるっている。ぶらぶら病、白血病、ガン、内臓の疾患、先天性障害児の出産、そして子や孫への遺伝の不安など、被爆者の苦しみは絶えない。

閉ざされた生活との苦闘

被爆してからの十年間は、わたしにとっても、まったく光明のない、閉ざされた生活であった。

たびかさなる病魔とたたかい、あるときは、生きる望みを捨てようとしたことさえあった。ささいなことにも腹をたてたり、幼い子どものようにすねて食事をとらなかったり、看病の母を困惑させた。自分一人が不幸な人間であるかのようにふるまっていたのである。母は、そんなときでも、苦言をもらすとか、怒るということをせず、わたしの気のすむままに、せいっぱい努力してくれた。

今日ふりかえってみると、被爆してから数年間の肉体的、精神的な苦悶は、いろいろな意味でわたしをきたえてくれたようにも思う。わたしの若い生命力が、その苦悶からぬけだすことをうながしたのだろうか。死んでしまいたいと考えた反面、それにもましてつよく生きなければならぬという気持ちがわきおこり、まったく動かすことのできなかつた身体を、少しずつ動かす訓練も、自分で日課とするようになった。そうすることによって、いままでになかつた生活のリズムがつくられていった。寝たきりながら、なんとか身体を動かすことによって、ささやかではあるが、生きる希望も生まれてきた。

自宅の一室に寝たまま、格子戸をとおして景色をながめ、そのつまらなさになげいていたのが、いつしか、ゆきかう人びとと、格子ごしの景色との調和を楽しむ余裕さえもつようになってきた。わずかにさしこむ太陽の光にも、身をのりだすようになった。そして、むしろ美しい草花、自然にあこがれるようになっていた。

ちょうどそのころ、ふとしたことで編物に興味をもつようになった。母が買ってきてくれた編物機械を、バランスのとれない身体をささえながら、入門書をたよりに動かし、少し編んではまた本を読むといった調子で、編み方をおぼえていった。一巻きの毛糸から一枚のセーターができる、その楽しさが、絶望からわたしを遠のけてくれた。

当時、社会とのつながりは、母や家族との会話、ラジオ、それに新聞、雑誌にかぎられていた。とくに新聞は、どれがだいじな記事か、事件か、などまったくおかまいなしながら、わりあいていねいに読んだ。

被爆後十年間にいろいろの事件が起こった。印象にのこったものを列挙していくと、まず一九五〇年のレッド・ページ、すぐさま警察予備隊設置。レッド・ページにはなんの疑問もいだかないわたしだったが、警察予備隊の設置については、またふたたび「戦争への道」をすすむのではないかしら、と危惧した。もちろん、直感でそう思っただけだった。その前年の「下山事件」、「三鷹事件」、「松川事件」、そして三年後の「白鳥事件」、「青梅事件」などもつよく印象にのこっている。これらの事件は、共産党員のしわざであるというふうに、当時の新聞は大的に書きたてていた。「共産党はやっぱりおそろしい人たちの集まりだね」と母と話していたことを思い出す。

こうして、たしかにまだだまされてはいたが、当時、被爆者にはそれこそなんの保障もなかった。わたしたちのように「学徒」の場合は、学業すら放棄させられ、「国」のために働かさね、そのあげく不具にされてしまったのだ。わたしが代償として受けとったのは、三菱電機からの見舞金三千八百円と、市役所から支給された三百円きりであった。だから、「政府はなに

もしてくれない」という不満や原爆の恐ろしい体験から、わたしの場合、徐々にはあるが、社会の動き、政治のあり方に関心がむいていったのは当然のことかもしれない。

ある日のこと、新聞で「保安隊が富士山麓ではじめて演習を行なう」という記事を読んだ。

新聞の下すみに、一段の見出しで小さくのつていたと記憶しているが、そのときは、非常なショックで身体がわなわなふるえるのをおさえることができなかった。この日、一日中そのことが自分の頭をはなれなかった。夜になっても、興奮で寝つかれず、朝の訪れが感じられるまで考えつづけていた。とはいっても、これといったたしかな政治的判断をもっていたわけではないが、ただ怖ろしかったのである。あまりのおどろきで、そのことを母や家族のものに話すのもためらわれ、じっと自分の胸にしまいこんでしまった。

編物が、自己流ではあるにしても、なんとか形のついたものを編めるように上達してから、毎日を規則正しく生活できるようになった。

なにを思ったか、そのころから、新聞の記事のうち自分の関心をひいたものだけスクラップするようになった。廃物利用のワラ半紙を台紙にして、一枚一枚をノリではっている。はじめのうちは一年に二、三枚ぐらいのものだった。その最初のスクラップの記事は、一九五三年八月四日付『朝日新聞』のものである。「原爆投下」から満八年」と原爆の雲をあしらった地紋

に、文字は黒でしるされている。さしえは映画「ヒロシマ」に主演した山田五十鈴を福井芳郎画伯が描いたものだ。短い囲み記事だが、わたしにとっては記念的碑なものなので、ここに全文を紹介させていただく。

「めぐり来る八年目、広島は八月六日、長崎九日——原爆の問題はいままであまりにも多く語られて来た。東から、西から、世界のあらゆる人々がこの地を訪れ様々の感懐を語っている。文学に、映画・絵画にも表現され「原爆文学」という言葉も生まれた。両市の焼土に立ってそれぞれの角度でものを見、考え、ある人は「原爆を売物にしている」と批判し、他の人は「なぜもっと訴えないか」となじり世界の関心を集めつつこの二つの運命の都市は今八度目の記念日を迎えようとしている。あらゆる声をよそに広島・長崎両市民は黙々と復興の道を歩み、街は建設の息吹きにあの日の惨状を忘れようと努力している。しかしまだ問題が解決したのではない。広島市は平和都市の建設財源を外債に頼ろうとし、全世界に発表された平和宣言にも時流の波の起伏は微妙である。欧亜数カ国には「広島デー」さえ設けられ平和希求の声を高めているが、精神養子・原爆孤児・障害者の治療対策など原爆の問題はようやくこれから本筋に入ろうとしている。われわれは今こそ真剣に考え直すべき時ではなか